



民話 人形山の残雪ものがたり

昔、むかし、山のふもとに信心深い年老いた母と娘が住んでおりました。
あるとき母は、重い病気になりました。二人の娘は一生懸命看病しましたが、病は重くなるばかりです。
娘たちは毎朝、山の頂上に祀ってある白山権現様に向かって両手を合わせ『母の病が早く直りますように』と拝んでおりました。

二人の熱心な願いが通じたのか、ある夜、権現様が夢枕に立たれ『これこれ娘達よ、病に良く効く湯がある。谷川を探すが良い。』と告げられました。

夜明けを待って二人の娘は谷川をさかのぼり、夢のお告げの湯を探しに出かけとうとう探し当てました。喜んだ娘たちはそれから母を背負っては、毎日その湯へ通い続けました。

不思議にもあれほど重かった病が目に見えて良くなり、やがて母はすっかり元気を取り戻しました。

そこで二人の娘はお礼参りをするため、山頂の権現堂を目指して険しい山を登りました。ところがこの山は、山伏たち男だけの荒々しい修行の道場で女が登ることは固く禁じられていたのです。権現堂にお礼をのべ、家へ帰ろうと山を下りかけたところ、急に山が荒れ、雪が舞い始めました。二人の娘は吹雪の中手を取り合い、歩き続けました。

ふもとの家では、母が帰りを今か今かと待っておりましたが、ついに娘たちは戻って来ませんでした。

やがて長い冬がすぎ春を迎えたある朝のこと、母は山肌に二人の娘を見つけたのです。

それは手をつないだ姿に見える残雪でした。

それからは、春になると決まって「ひとかた」が現れるようになり、村人たちは親孝行な二人の娘が手をつないだ姿だと信じて誰からともなくこの山を「ひとかた」と言い、今は、人形山(にんぎょうざん)と呼ぶようになりました。

<平壮年会・人形山整備事業史>

- ・昭和35年 初の、人形山登山道策定調査実施。【帰路遭難騒ぎとなる】
- ・昭和42年 頂上と宮屋敷に木製鳥居建立。
- ・昭和52年 宮屋敷の鳥居を再建
- ・昭和55年 人形山開発20周年記念事業(前夜祭、道標、登山)
- ・平成 2年 人形山山開き30周年記念事業(前夜祭、道標、登山)
- ・平成18年 宮屋敷の鳥居を再建—2
- ・平成22年 人形山山開き50周年記念事業(前夜祭、記念碑設置、登山)